HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Miroš Okuka, Eine Sprache-viele Erben. Sprachpolitik als Nationalisierungsinstrument in EX-Jugoslavien, Klagenfrut u.a : Wiser 1998 (Österreichisch-bosnische Beziehungen, 4), 163 S.
Author(s)	徳野, 芳弘
Citation	西洋史論集, 7, 112-116
Issue Date	2004-02-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37460
Type	departmental bulletin paper
File Information	7_112-116.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Miroš Okuka, *Eine Sprache-viele Erben. Sprachpolitik als Nationalisierungsinstrument in Ex-Jugoslavien*, Klagenfurt u.a.: Wieser 1998 (Österreichisch-bosnische Beziehungen, 4), 163 S.

徳野芳弘

はじめに

ユーゴスラヴィアの研究において、文化と言語は特に重要な位置を占めている。その形成、発展、そして崩壊のどの局面においても、「何がユーゴスラヴィアの文化なのか」「ユーゴスラヴィア国民の言語とは一体どのようなものなのか」といった問題が争われてきた。この論争は言語学的であると同時に、政治的でもあった。

著者のミロシュ・オクカは現在ミュンヘン大学のセルボクロアチア語[1]の教授であり、本書は厳密には歴史学ではなく言語学の書である。しかし、言語学者のみならず歴史学者にとっても、本書は必読の書である。なぜならまず、ユーゴスラヴィアの歴史において言語が重要な位置を占める以上、歴史学研究は言語学研究と必ず重なり合うからであり、そして本書は、まさに歴史学と言語学が重なり合う部分、すなわちセルボクロアチア語の言語史をテーマとしているからである。本書の構成は以下の通りである。

序文
第一章　セルボクロアチア語とセルボクロアチア人
第二章　ボスニアーヘルツェゴヴィナにおける言語混乱―一九世紀から第一次世界大戦
第三章　さらば、セルボクロアチア語！
第四章　古い言語領域における新しい状況

更に、補遺として、セルビア語、クロアチア語、ボスニア語の文法、音韻、文字、正書法、固有名詞の差異が示されている。

序文は著者ではなくゲルハルド・ネヴェクロフスキによるものだが、そこではセルボクロアチア語の言語史を見る上で重要なことが以下のようにまとめられている。すなわち、バルカン半島のスロヴェニアからブルガリアに至る地域では、明確な言語の境界線は存在していない。そして一九九〇年代のユーゴスラヴィアの崩壊、その後の内戦においてセルボクロアチア語もまたセルビア語、クロアチア語、ボスニア語へと分割されたが、この分割は言語の自然な成長によるものではなく、言語拡充 Sprachausbau、すなわち政治的に行われた恣意的な取捨選択によるものであったということである。

第一章では、一八五〇年のウィーン文語協定から第一次世界大戦までの、セルビア人、クロアチア人共通のセルボクロアチア語を作り出そうとする言語学者、文献学者たちの運動が取り上げられている。中心となっているのはクロアチアのザグレブに置かれたユーゴスラヴ科学芸術アカデミー（ＪＡＺＵ）である。ＪＡＺＵを中心とする言語学

者、文献学者は、ボスニアやダルマチアの方言を中心にセルボクロアチア語を作り出し、やがてセルビア人とクロアチア人が共有するセルボクロアチア語という概念は国際的に認知されるようになった。その結果、第一次世界大戦期には、言語の統一のうえで問題とされたのは発音の差異（セルビア人はエ方言、クロアチア人はイェ方言）と文字の差異（セルビア人はキリル文字、クロアチア人はラテン文字）のみとなっていた。セルビア、クロアチア双方の言語学者たちは、セルビア人はキリル文字を、クロアチア人はイェ方言を放棄すべきだと主張したが、この主張が受け入れられることはなかった。キリル文字について言えば、オーストリア＝ハンガリー政府のキリル文字禁止という状況下にあっては、キリル文字の使用はオーストリア＝ハンガリー政府への抵抗という象徴的な意味を持ったからである。一方でイェ方言はクロアチア人だけではなくセルビア人にとっても多くの文化的遺産を持つ重要な方言であったため、やはり放棄されなかった。

なお、本章では、「セルボクロアチア人」Serbokroaten という概念が登場する。通常、セルビア人とクロアチア人によるセルボクロアチア語の共有を核とした国民の名称としては「ユーゴスラヴ人」Jugoslawen を使用するが、著者は一つの言語を話す一つの民族という考え方に基づいて、セルボクロアチア語を話す民族があるとすれば、それはセルボクロアチア人であるという考えに立っている。

第二章では、第一章と同時期の、ボスニアーヘルツェゴヴィナの複雑な言語状況と、そこで上述のセルボクロアチア語が採用されるに至った経緯が取り上げられている。一八七八年にオーストリア＝ハンガリーはボスニアを占領し、二重帝国の共通蔵相の管理下に置いた。ボスニア愛国主義を掲げて失敗した共通蔵相ベンヤミン・カーライに代わって、一九〇三年に共通蔵相に就任したイシュトヴァーン・ブリアンは、一九〇七年、公的にセルボクロアチア語の使用を認めた。これによってボスニアーヘルツェゴヴィナはセルボクロアチア語を公的に使用する最初の地域となったのである。第一次世界大戦が始まった後も、オーストリア＝ハンガリー政府はボスニアでセルビア人が多数を占めているという事情に配慮して、セルボクロアチア語の公的な使用の廃止は行わなかった。

第三章において、時代は第一次世界大戦後へと移る。第一次世界大戦の結果生まれたユーゴスラヴィアにおいてセルボクロアチア語は国語とされたが、ユーゴスラヴィアの政治をセルビア人が主導し、セルボクロアチア語もセルビア語的な特徴（語彙、綴字法等）を帯び始めたためにクロアチア人の反発を呼んだ。そしてさらに、どの変種が正当であるのかについての議論も巻き起こることとなった。両大戦間期から第二次世界大戦中の独立クロアチア国（ＮＤＨ）に至る時代においてクロアチアの言語学者と政治家は、クロアチア語のセルボクロアチア語からの分離を試みた。この動きは、一九六〇年代に再開され、現在に至っている。

そして第四章では、九〇年代のユーゴスラヴィア連邦の崩壊、およびその後の内戦期におけるセルボクロアチア語について分析される。著者によれば、セルビア人、クロアチア人、ボスニア人たちは共通のセルボクロアチア語を放棄し、自らの固有の言語としてのセルビア語、

クロアチア語、ボスニア語を新しく構築したのである。

以下では、本書全体のまとめともいうべき役割を担っている第四章を中心に、「セルボクロアチア語」という名称についての著者の論点を整理したい。

一　二つの「セルボクロアチア語」

著者は、二つの「セルボクロアチア語」を区別して使用している。

一つめの「セルボクロアチア語」は、一九世紀に主にクロアチアの言語学者たちによって、それまでの「イリュリア語」に代わって採用された用語である。この「セルボクロアチア語」は、スロヴェニア、クロアチア、ボスニア、セルビア、ブルガリア等で話されている、明確な境界を持たない諸方言の総称として用いられた。「セルボクロアチア」は六―七世紀にこの地に定住した非常に似通った民族、すなわちセルビア人とクロアチア人に基づく命名であり、従って歴史的にも言語学的にも正当な命名であるとクロアチアの言語学者たちはみなした、と著者は主張する。

二つめの「セルボクロアチア語」は、セルビアとクロアチアの言語学者、文献学者たちが共通の文語を形成しようとしたとき、その文語の名称として採用したものであった。この共通の文語はセルビア人とクロアチア人という二つの国民の遺産であり、当時まだ国民として形作られていなかったボスニアのムスリムたちやモンテネグロ人の関与はなかった。このため、「セルボクロアチア語」という名称は、時間をかけてではあったが「不連にも」正当化された、と著者は主張する。

この、共通の文語としての「セルボクロアチア語」に対し、セルビア人とクロアチア人、それにボスニアのムスリムたちは既に固有の文語伝統を持っていた。このため、二〇世紀にセルボクロアチア語という標準語の作成が試みられたとき、それぞれの文語伝統は衝突し、また同時に、相互に影響を与えあった。セルボクロアチア標準語はそれぞれの文語伝統の妥協の産物であったから、それぞれの文語伝統に、固有の文語伝統からの逸脱を生じさせた。

著者によれば、セルビア人、クロアチア人、ボスニア人、モンテネグロ人の標準語に「セルボクロアチア語」という名称を与えたのは不適当で、第一次ユーゴスラヴィア（一九一八―一九四五）と第二次ユーゴスラヴィア（一九四五―一九九一）の行政当局によって押しつけられたものであった。著者はこの「政治的過失」に対し、『セルボクロアチア語』という用語が民主的なプロセスで既にはるか前に放棄されていれば、あるいは人々がそれを新シト語あるいは以前のイリュリア語で置き換えていれば良かったのに」と嘆いている。この「政治的過失」が、セルビア、クロアチア、ボスニア、モンテネグロにおいてそれぞれ別個の標準語が一層発達する事態を引き起こすことになった、という。

二　新しい言語状況

著者は、諸方言の総称としての「セルボクロアチア語」と、セルビ

ア人、クロアチア人、ボスニア人、モンテネグロ人の共有するものとして想定された一つの標準語としての「セルボクロアチア語」とを区別し、セルビア、クロアチア、ボスニアの現状を分析している。

著者によれば、一五〇年にわたる言語統一の試みは結局失敗する運命にあった。セルビア人、クロアチア人、ボスニア人たちはすでに固有の文語伝統を保有していたため、言語統一の試みと固有の文語伝統との衝突は不可避であった。内戦の結果生じたセルビア人、クロアチア人双方の国民国家は、現在、それぞれセルビア語とクロアチア語という二つの標準語の存在を公言している。また、ボスニア語はこの二つの言語の奇妙な混合物であるが、一定の言語共同体で用いられており、国際的にもその独立が認められている、という。

これら三つの標準語の公的宣言は、諸民族は自らが使用する言語の名称において自由であるべきであり、公的に彼らが主権を持つ国民国家において、その国民の名前で使用されるべきだ、という考えに基づいている。一方、「セルボクロアチア語」という一つの文語・標準語の消滅の原因は、一つの民族あるいは国家の標準語としてのこの言語の存在、発展を保証する基盤がもはや存在しないためである、と著者は指摘する。

標準語は、言語学的な基準によってではなく、社会的、あるいは政治的な要請によって発生するものだ、というのが著者の主張である。旧ユーゴスラヴィア諸国の言語状況の複雑さや、セルビア語、クロアチア語、ボスニア語の間の差違がどのようなものであるのかといったような問題はあるが、法的にこれらの言語はそれぞれの主権国家の国語としての使用が認められている。だが、「セルボクロアチア語」という概念が全く消滅したわけではない。著者は各主権国家の国語としてのセルビア語、クロアチア語、ボスニア語に対し、これらの互いに似通った諸語を総称する概念としての「セルボクロアチア語」を提唱している。

著者の主張によれば、「セルボクロアチア語」というのは言語領域として存在したのであって、標準語として完成されたことはなかった。そしてその領域内では常にセルビア－正教、クロアチア－カトリック、ボスニア－イスラムの三つの文化圏がそれぞれの言語伝統を持って衝突していたのである。

著者が第一次、第二次の二つのユーゴスラヴィアの為政者による「セルボクロアチア語」という用語の押しつけを「政治的過失」と主張するのは、まさにこの名称の押しつけこそがセルビア人、クロアチア人、ムスリム、そしてモンテネグロ人のそれぞれの別個の標準語の発達を促進したと考えるからである。一九一八年以降を第三章「さらば、セルボクロアチア語！」としてまとめるのも同様の理由からだと考えられる。

おわりに

著者の主張によれば、セルビア人、クロアチア人、ムスリムらの共通の標準語に「セルボクロアチア語」という名称を与えたのが誤りであったのだということになる。これは本当なのだろうか。二つの点か

ら疑問を述べたい。

一つは、では他の名称であれば彼らそれぞれの標準語の発達を阻止できたのだろうか、という疑問である。もし著者の言うようにセルボクロアチア語が「イリュリア語」「新シト語」と呼ばれていたなら、彼らの言語の分裂は発生しなかったのだろうか。

セルボクロアチア語において問題であったのは、第一次ユーゴスラヴィアと第二次ユーゴスラヴィアのセルボクロアチア標準語を求める活動がセルビア人、クロアチア人、ムスリムなどの言語伝統と衝突したことであり、言語の名称ではないのではなかろうか。

もう一つの疑問点は、「セルボクロアチア」という名称そのものに歴史的要因があったのではないかということである。

著者自身が第一章、第二章で述べているように、第一次世界大戦時にオーストリア＝ハンガリー二重帝国は、ボスニアを除くその領域および占領地域において、セルビアの国民的・宗教的学校を禁止・撤廃するとともに、キリル文字と「セルボクロアチア語」という名称の使用を廃止した。この結果としてキリル文字と「セルボクロアチア語」という名称はオーストリア＝ハンガリーに対する抵抗の象徴となったのである。

また、第二次ユーゴスラヴィアにおいて、セルビア人とクロアチア人の言語共有という概念は、一九世紀のイリュリア主義運動から唯一受け継がれてきた重要な要素であった。それゆえに、一九六〇年代後半にクロアチアで始まったクロアチア語のセルボクルロアチア語からの分離の試みは、セルビア人とクロアチア人の政治、経済、文化等全ての協力に疑問符を投げかけることにつながったのである。[2] 第二次ユーゴスラヴィアの文化的核をなしていたのはセルビア人とクロアチア人の言語の共有であった。

このように考えると、果たして「セルボクロアチア語」という名称を押しつけたことが「政治的過失」であったと言えるのだろうか。

だが少なくとも、ユーゴスラヴィアという国家による言語の拡充がそれぞれの民族の言語伝統と衝突したという主張は正しい。それぞれが自らの民族言語をセルボクロアチアの標準語と主張した場合でさえ、民族言語は妥協や配慮によって他の言語伝統へ接近し、この接近がそれ自身の固有の言語伝統からの逸脱となった。この矛盾がセルボクロアチア標準語の完成を阻んだのであり、その未完成がセルボクロアチア言語領域における三つの標準語の発展につながったのである。

従って、ユーゴスラヴィアの歴史を考える上で、本書は一読に値すると言える。だが批判的に読まれるべき部分も多いように思われる。

註

(1) ユーゴスラヴィアのうちセルビア人とクロアチア人の共通の言語として想定されたこの言語は様々な名称で呼ばれており、邦訳も「セルボクロアチア語」「セルボ・クロアチア語」「セルビア・クロアチア語」等々と一定しない。本稿では著者が Serbokroatisch で統一しているのにあわせて「セルボクロアチア語」とした。

(2) Wachtel, Andrew Bruch, *Making a Nation, Breaking a Nation : Literature and Cultural Politics in Yugoslavia*, Stanford, Stanford University Press, 1998, p185.